

西欧とユ-デントウ-ムのはざま：
第1次世界大戦期におけるドイツ・ユダヤ人の諸問題
(歴史における他者認識-1-<特集>)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 真理, Nomura, Mari メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000363

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



西欧とユードントゥームのはざま

——第一次世界大戦期におけるドイツ・ユダヤ人の諸問題——

野村真理

I 「ユダヤ人であることの強制、 ならびにその不可能性について」

「人と話していて、こんなことがある。何かのはずみに相手が急に私をも含めた複数形でこう言う。『われわれユダヤ人は……』こんなとき、私は強いとまではいわないにせよ、なにか重苦しいような不快感を覚える」¹⁾。それは、私がユダヤ人ではありえないのに、にもかかわらずユダヤ人でなければならぬからだ。1912年ウィーンに生れた作家・批評家ジャン・アメリーが「いわゆる自我の形成期」に触れた世界は、ユダヤ人の世界ではなかった。オーストリア風の長靴下をはき、オーストリアなまりの強いドイツ語を話していた少年時代、夜の雪を踏んで出かけた田舎の教会のクリスマス・ミサでは、ツリーが美しい飾りをキラキラさせていた……アメリーが東欧ユダヤ人の言葉であるイディッシュ語の存在を知ったのは、19才になってからである。彼は、一度失った伝統なら回帰することもできようが、記憶のなかにもとめてもさっぱり見つからないユダヤ的世界の人間——ユダヤ人——に今さらなることなどできないという。にもかかわらず、彼はユダヤ人でなければならなかった。ナチのドイツが彼にユダヤ人であることを強制し、彼のドイツ人としての過去の人生は、ドイツによって否認されたのである。そのときから彼にとってドイツは、「憎むべきものであって、また憎悪することが社会的な義務でもあるもの」となった。だがどうだろう。亡命地で、あるいは強制収容所で、突然目の前に郷愁の念とともに浮んでくるもの、それは、自分を追放した当のもの、自分に拷問を加える当のもの、ドイツなのである。「ユダヤ人であることの強制がたえずその不可

能性と衝突することがなければ、すべてはもっと軽やかであつたらう」²⁾。

近代西欧のユダヤ人問題を考える場合、まわりついでに離れぬ困難さのひとつは、アメリーが端的に表現しているように、西欧的なものとユダヤ的なものとの「分裂的共存」にあるであろう。中世においてこの二つのものが、ゲッターの目に見える壁によってまがりなりにも区切られていたとすれば、その壁が取り払われた近代においてはじめて、西欧的なものとユダヤ的なものとの「分裂的共存」は、その特有の困難さを発揮しはじめたといえるかもしれない。この二つのものは、時に異質な他者として分裂、対立し、互いに排除しあうのだが、同時に決して明晰には区別できないものとして、さらに言えば自己に他ならない他者として、ひとつの存在体のなかに共存している。すなわち、西欧キリスト教世界の側からみれば、ユダヤ人は異教の他者であると同時に、自らの内なる重要な構成員の一部である。とりわけユダヤ人の西欧社会への進出が本格化した近代においては、音楽や文学など文化・芸術の分野にかぎっても、彼らの貢献を無視することは不可能であろう。次にユダヤ民族についてみれば、西欧ユダヤ人と東欧ユダヤ人とは、同じユダヤ人としては一体でありながら、同時に、近代以降西欧的なものに急速に同化していった西欧ユダヤ人にとって、ユダヤ教の伝統的世界に生きる東欧ユダヤ人は、心情的にドイツ人やフランス人よりも疎遠な他者であり、場合によっては敵とさえなった。さらに近代西欧に生きる一人の西欧ユダヤ人についてみれば、一個の人格のうち、西欧的なものとユダヤ的なもの（ユードントゥーム）とが分裂しつつ共存している。この「分裂的共存」は、アメリーのように外部から強制されたものである場合もあり、あるいは本人によって自

覚的に引き受けられている場合もあり、また本人によっては意識されていない場合もあるであろうが。

さてまずはじめの、西欧キリスト教世界とユダヤ人との特殊な関係は、たとえばスラヴやオリエント世界との関係と比較するときいっそう明瞭となる。スラヴやオリエントは、近代にいたるまで西欧の人人のイメージのなかでは、歴史的にも、地理的にも西欧の外の世界であった。そして近代においては、西欧列強こそ現在の世界史の発展を指導する民族であるという観点から見れば、それは「歴史なき民族」の世界であった³⁾。というのも西欧に源を発した資本主義が、世界貿易と世界市場とを媒介として世界中の民族をその運動に引きずりこみ、世界を資本主義体制へと平準化してゆくことが歴史の必然的な発展法則であるとすれば、後進の非西欧諸民族は、その運動に寄与するかぎりでは世界史的意義をもつとされるからである。西欧の資本主義による世界征覇の完成に与せず、なお西欧の外で停滞している民族は、その歴史的自己意識の欠如のゆえに、「歴史なき民族」として蔑みの対象となった。だがかつて西欧に進入したゲルマン民族のように、スラヴやオリエントの諸民族もまた、世界史の舞台に初めて登場する民族がもつ、あの未展開の発展能力を秘めた者たちとしては恐れの対象でもあり、また西欧文明に倦んだものたちにとっては、ロマン主義的な憧れの対象でもあった。いずれにせよ西欧を中心として回転する世界史においては、非西欧諸民族は完全に他者化されており、彼らを他者とする西欧自身とのかわりにおいて問題にされはしない。彼らは、やがて西欧の資本主義的諸関係のなかに否応なく吸収されるべき存在でしかないのである。このような観点にたつかぎり、非西欧諸民族からは、「民族問題」というものの歴史的意味が奪われてしまうのである。

ユダヤ民族の場合はどうか。ユダヤ民族は西欧にとって、スラヴやオリエントのような意味での他者ではない。まず歴史的に見れば、ユダヤ民族の宗教であるユダヤ教は、西欧世界のキリスト教の生みの母であった。そしてヘーゲル的な意味では、ユダヤ民族はキリスト教を生み出すことによって自らの世界史的使命を終え、いわゆる残骸民族となりはてたのだが、それでユダヤ民族と西欧との関係が切れた

わけではない。離散したユダヤ民族は、古来より地理的にもまさしく西欧世界のただなかに巣くひ、ある意味では西欧とともに世界史の行程をたどってきたからである。いやそれどころかユダヤ人の一部は、宮廷などでキリスト教社会の支配者たちと密接な関係をもち、その財力、担税力によって隠然たる政治勢力を形成していたのであった。にもかかわらずユダヤ民族は、西欧にとってやはり他者である。すなわち彼らユダヤ人は、キリスト教世界にあっても自らのユダヤ教をかたくなに奉じつづけ、西欧と一体化することなく生きてきたのである。キリスト教は、神に選ばれた一民族のための宗教にすぎぬユダヤ教の選民思想を止揚し、普遍的人間愛を根本原理とした。民族宗教にたいして普遍宗教であるという意味では、キリスト教は宗教の完成体である。にもかかわらず西欧キリスト教世界は、この止揚されるべき次元にとどまっているユダヤ教徒たちを、2000年ちかくたった今も吸収しつくすことができず、自らの普遍性をまっとうできないでいるのだ。西欧世界におけるユダヤ民族の共存は、西欧の普遍性に穴を穿つものである。ユダヤ民族は西欧が体内にかかえこんだ弱点であり、西欧世界に同化しない彼らのかたくなさこそ、しばしば迫害の口実とされるのである。

次にユダヤ民族についてみれば、西欧ユダヤ人と東欧ユダヤ人とが、同じ時、同じところに、同じユダヤ人として、しかし時に敵対しつつ共存することは、場合によっては民族的な破滅を招きかねないものであった。同様に一人の西欧ユダヤ人についてみれば、一個の人格のうちに西欧的なものとユダヤ的なものとが分裂しつつ共存することは、人格的な破滅を招きかねないものである。周知のようにドイツでは、ユダヤ人の法的解放が完了し、「ユダヤ人問題」がようやく消滅するかにみえた19世紀末になって、再び反ユダヤ主義の亡霊がよみがえる。さらに第一次世界大戦期には、東欧から東欧ユダヤ人たちが、ポグロム難民や戦争難民となってドイツに流入し、それだけでなく失業や食料難に苦しむドイツの負担となって、ドイツ市民の反ユダヤ感情をかき立てる。一目でユダヤ人とわかる丈の長いカフタンを着て、巻毛をたらし、ユダヤ教の律法を忠実に守っ

て生活する東欧ユダヤ人たちは、ドイツ社会に同化したユダヤ人たちがとっくに清算したと思っていたユダヤの世界を持ち込んできた。東欧ユダヤ人たちは、「ユダヤ民族の同化不可能性」という反ユダヤ主義の決まり文句を裏付けることになり、彼ら東欧ユダヤ人のために、ドイツ・ユダヤ人たちが、一世紀にわたる同化の努力の結果手に入れた法的解放すら、取り消されかねない勢いであった。第一次世界大戦の動乱は、西欧ユダヤ人と東欧ユダヤ人とを隔っていた境界線を破壊する。東欧ユダヤ人の西欧流入という事態の新たな展開によって、ドイツ・ユダヤ人はドイツ人と東欧ユダヤ人との、あるいは西欧的世界とユダヤ的世界とのほざまに立たされることになるのである。両者のいずれに与するのか。両者は折り合いのつけられるものなのか。この小論では、自己と自己の内なる他者、自己に他ならない他者との関係のあり方を、第一次世界大戦期のドイツ・ユダヤ人たちが直面した諸問題をめぐってみてゆきたい。

- 1) ジャン・アメリー著、池内紀訳『罪と罰の彼岸』法政大学出版局、1984年、147ページ。
- 2) 同上、180ページ。
- 3) 良知力「向う岸からの世界史」、「四八年革命における歴史なき民によせて」（『向う岸からの世界史』未来社、1978年、所収）を参照。また西欧中心の普遍史とユダヤ人問題との関係について、簡単には、拙稿、ヘーゲル左派論叢第3巻『ユダヤ人問題』（お茶の水書房、1986年）解説「ヘーゲル左派とユダヤ人問題」を参照。

II 第一次世界大戦前の ドイツ・ユダヤ人

ドイツでは、1781年ヴィルヘルム・ドームが『ユダヤ人の市民的状態の改善について』を著し、ユダヤ人の解放が公論にのぼって以来、ほぼ一世紀を経過した1871年の帝国憲法施行により、フランスに遅れること約80年にしてようやくユダヤ人の法的解放が実現される。啓蒙思想のメルクマールの一つともいべきユダヤ人の解放がこのように遅れたことは、ドイツ社会の後進性の反映にほかならないとはいえ、そのドイツでも、もはや中世的野蛮の再来はありえ

ぬと思われた。現在、近代ドイツのユダヤ人問題および反ユダヤ主義研究の第一人者であるラインハルト・リュールuppは、ドイツにおけるユダヤ人問題破局の原因を、遅れて近代に参入したドイツの政治的、経済的、社会的自由主義の構造的弱体性に求めつつ、ドイツもまた、「市民的で自由主義的な原理の下で、また持続的な経済的繁栄を基礎にして、静穏な内的発展の期間がもっと長く続いていたならば、『ユダヤ人問題』を持続的に調停し、その解放という意味での最終的解決に到達したであろうことは十分に考えられる」と述べる。というのも、「好ましからざる、しかも厄介な少数者の社会的統合のためには、当面の軋轢を克服し、また古い偏見を恒常的に、障害なく取り除く必要がある」¹⁾からである。まして、まだ自由主義が一応の正当性を保持していた時代であって、ナチズムの到来を予感しさえしなかったドイツ・ユダヤ人には、同化の努力によって古い偏見を克服し、ドイツ国民として国家へ統合される可能性は、なお揺るぎないものと思われていた。同化、統合といっても、社会に異質なものを異質のままに承認する多元主義的な枠組みがあれば、社会内の少数民族がそれぞれの文化的伝統をそれなりに発展させてゆくことも可能であろう。だがこの時点でドイツ人もユダヤ人も当然のこととして了解していた同化、統合とは、「厄介な少数者」が、支配民族の文化的価値体系を全面的に引き受けることを意味していた。そして実際に、ドイツ人としてのアイデンティティを完成したユダヤ人も少なくないのである。

世紀末のウィーンを代表する文化人の一人シュテファン・ツヴァイクは、「学校においても、大学においても、あるいは文学においても、かつてユダヤ人としての障害や軽蔑を経験したことはなかった」という。「昔からウィーン天才性は、……あらゆる民族上の、あらゆる言語上の対立を自己のうちにおいて調和させることだったのであり、その文化はあらゆる西欧文化の総合だったのである」。ユダヤ人は、「この都にたいする熱烈な愛によって、適応しようとする意志によって完全に同化し、オーストリアの名声のために仕えることに幸福を感じていた」。ツヴァイクのウィーンにおいては、ユダヤ的

なもの、ドイツ的なもの、ひとつの西欧文化に統合されていた。ウィーン文化人である彼は、ユダヤ人であると同時に矛盾なくドイツ人でありえたのであり、もっとふさわしくは、ヨーロッパ人であると自覚していたのである³⁾。

典型的な同化ユダヤ人ブルジョアで、ドイツ的な教養をたっぷり享受した若きテオドール・ヘルツルは、騎士的名誉にたいする憧れにおいて、ウィーンのというよりプロイセン的であるかもしれない。彼は、伝統的にドイツ民族主義色の強い学生同盟の「アルビア」に所属する。そしてアルビアのクラブカラーである青の祭服とアルビアの帯を身につけ、象牙の握りに F・V・C (Floriat Vivat Crescat 栄えよ、生きよ、成長せよ) と刻まれた黒い杖を持ち、同じ同盟の仲間と隊互を組んで練り歩いたのである⁴⁾。だがアルビアは、ヘルマン・パールの事件にさいして、ヘルツルを「ユダヤ人として」あっさり見捨ててしまった。1883年、リヒャルト・ヴァーグナーの死に際して催された学生の式典で、壇上にたったパールはヴァーグナーの反ユダヤ主義を称賛し、ドイツ民族主義を謳い上げて警察の介入をまねく。アルビアがいちはやくパールを支持したとき、ヘルツルは、ユダヤ人として、いや個人的な理由によるよりも「自由を愛するもの」として、アルビアの行為に異義を唱え、アルビアからの脱退を申し出た。これにたいしてアルビアは、彼の脱退を自発的なものとして認可するのではなく、彼を「追放処分」に処した。あるいは侮辱的な学生用語でいえば、ユダヤ人として「放逐 schassen」することに決めたのである⁵⁾。この「放逐」によって、青い祭服を身につけた彼の過去はひどく滑稽なものとなってしまった。教養においても服装においても一分のすきも無いようにつとめ、将来演劇家として成功をおさめることを夢見る野心満々のヘルツルには、「放逐」は実際耐えがたい出来事であったにちがいない。同じ大学で学ぶユダヤ人学生であったシュニッツラーは、ドイツ民族主義者であったヘルツルを「確信的というより狂言的といえそうなシオニストに転向させた最初のきっかけ」はこの事件であった、と回想する⁶⁾。ヘルツルの転向について鋭い心理的分析を試みたカール・E・ショースキーは、ヘルツルに

とって「ユダヤ人として」のアルビア追放を痛ましいものにしたのは、若きヘルツル自身がユダヤ人になりたいして嫌悪の情を抱いていたことによるとする⁷⁾。シュニッツラーもまた示唆しているように、ヘルツルはこの矛盾を、狂信的シオニストに転向することによって解消しようとしたのであろう。ヘルツルのプライドは、自らの転向が個人的な傷心にもとづくことを許さなかったものと思われる。彼は、転向の社会的必然性を示すために、ユダヤ人全体に危機意識をあおり立て、ユダヤ人全体をシオニズムへと駆り立てる必要があった。いや、そうすることによって他ならぬ彼自身の内に危機意識をあおらなければ、ユダヤ人になりたいする「嫌悪の情」を克服できなかったのもである。シオニズムへの協力を要請するため、財閥ロスチャイルド家宛てに書かれた草稿の随所に見られる脅し文句は、ヘルツル自身に向けられたものでもあっただろう。そこではヘルツルは、ヨーロッパ・ユダヤ人の終末を告げる予言者として現れる。すなわちヨーロッパのユダヤ人はカタストロフへと向っており、この運命は、どんなにヨーロッパ文化に同化していようと、あるいはロスチャイルド家のように財力をもっている、免れることはできないというのである。「ユダヤ人の生活条件が改善されることはありません。…… [石が斜面をころがり落ちてゆくように] われわれは、しまいには、下まで、まさに最底辺まで落ちるにちがいないのです。それがどのような外観を呈するのか、つまり、それにどのような形が与えられるのか、私には予測がつきません。それは、下からの [下層民による] 革命的な収奪なのか、それとも上からの [お上による] 反動的な財産没収なのか。われわれは追放されるのか。打ち殺されるのか。私が思うに、およそこれらのことすべてが起こりうるし、まだ他の形も考えられるでしょう⁸⁾。

確かに、ユダヤ人の法的解放が実現されたのもつかの間、すでに1870年代から反ユダヤ主義の黒雲は見え隠れしていた。ヘルツルにかぎらず、敏感なユダヤ人知識人の多くは、反ユダヤ主義によって苦々しい体験を余儀なくされていた。反ユダヤ主義を標榜する学生同盟と大部分ユダヤ人からなる団体との集団衝突、大学の講義室、通路、実験室での個人的

挑発は日常茶飯事であり⁹⁾、ドイツ文化に同化したユダヤ青年にとって、反ユダヤ主義が、政治的、社会的にというより、精神的に与えた打撃は測り知れないものがあつた。ユダヤ青年というだけで、周囲は彼のことをほっておかず、その精神を引っ掻き、いや、血のでるまで切りさいなんだのである¹⁰⁾。たしかにヘルツルのシオニストへの転向は、ドイツ・ユダヤ人において、「同化による統合」という神話の崩壊の始まりを象徴的に示す一件ではあつた。

だがツヴァイクはいうまでもなく、シュニッツラーも、いやヘルツルでさえ、その人格的なアイデンティティはドイツ人であつた。あるいはヨーロッパ人であつた。シオニズムの指導者として公然と口にするには許されぬとしても、おそらくそのことを自覚するヘルツルは、いっさいの文化的シオニズムを無視し、もっぱら政治的シオニズムの駆引きに徹しようとした。ヘルツルの構想するユダヤ人国家は、ユダヤ的な国ではない。ヘブライ語は国家語とはならず、「いじけて、ひしゃげたジャルゴン、このゲッター語」であるイディッシュ語は、捨てられねばならなかつた¹¹⁾。ポーランド出身の作家アイザック・パシェヴィス・シンガーは、1935年アメリカに亡命した後もイディッシュ語で東欧ユダヤ人の世界をテーマとする作品を書き続けることにより、自らの東欧ユダヤ人としてのアイデンティティを保とうとした。このようなシンガーの心情とヘルツルとは無縁である。ましてツヴァイクやシュニッツラーにシオニズムがなじむわけはなかつた。自ら貢献していると自負するヨーロッパ文化を捨て、いまさらパレスチナの荒野野に行くことなど、どうしてできようか。ウィーン知識人の愛読紙、『ノイエ・フライエ・プレッセ』の文芸欄編集長だつたヘルツルは、文筆家ツヴァイクの発見者である。ツヴァイクはユダヤ人としてというよりも、自分の原稿を文芸欄に採用し、気さくに励ましてくれたヘルツル個人にたいする人格の好奇心と、おそらくは義理の気持からシオニズムに近づく。だが彼は、「この運動とちゃんとしたつながりをもとうとは思ってゐなかつた」¹²⁾。あちこちの喫茶店の地下室で行なわれていたシオニストの学生の集会に出席してはいたが、ツヴァイクは、そうした政治的集会につきものの大言壮語や

無遠慮さになじめなかつた。やがて彼は、ウィーンウィーンのヨーロッパ性を暴力をもって民族主義化したナチスの犯罪を呪いつつ、ヨーロッパ人である自らの故郷が失われたことに絶望して自殺する。そうすることによってツヴァイクは、永久に昨日の旧き良きヨーロッパ世界にとどまろうとしたのである。

非ユダヤ人たちは、ドイツ・ユダヤ人をどのように見ていただろうか。ベルリン反ユダヤ主義論争を巻き起こした論説「われわれの展望」において、ヘインリヒ・フォン・トライチュケは、よきユダヤ人すなわち同化した、ドイツ人になつたユダヤ人と、悪しきユダヤ人、すなわちユダヤ的ユダヤ人、東欧ユダヤ人とを区別する。そして彼はフェリクス・メンデルスゾーン、ファイト、リーサー等の名をあげながら、彼らは、「ドイツ精神の崇高かつ優秀な特色を尊敬に値すべく備えたドイツ人であつた」¹³⁾と述べる一方で、「ドイツ語を話すオリエント人以外の何ものでもないユダヤ人」¹⁴⁾の危険を指摘するのである。「尽きることを知らぬポーランドの揺りかごから東部国境を越えて、年々功名心に富むズボン売りの若者たちの群が流れ込み、その子や孫が、いつの日か、ドイツの金融界と新聞を支配することになるだろう。彼らの流入は目に見えて増大しており、したがってこの異質の民族をどのようにして我が民族と融合させるべきかが、いよいよ重大な問題となつてきている」¹⁵⁾。東欧ユダヤ人の大量流入が本格化するのには、1881年のロシアのポグロム以降のことであり、1879年の時点でのこのトライチュケの指摘は、事実と合致してはいない。東欧ユダヤ人といっても、1881年以前についていえば、ロシアの比較的裕福な家庭出身の学生や、ドイツとロシア間の交易に従事する商人が多く、また特にプロイセンは、これら他国出身のユダヤ人の居住を厳しく制限し、しばしば追放措置を取つてきたのである。だがここでは事実が問題ではなく、トライチュケがドイツ・ユダヤ人と東欧ユダヤ人とを区別している点、さらにトライチュケのようなインテリまで含めて、ドイツ人一般が東欧ユダヤ人にたいしてステレオタイプ的に抱いていたイメージが重要であるだろう。

トライチュケ流の区別や東欧ユダヤ人にたいするイメージは、ドイツ・ユダヤ人の共有するところで

もあった。一般にドイツ・ユダヤ人ブルジョアと東欧ユダヤ人とは、社会的にほとんど触れあうことがなかった。たとえば、東欧ユダヤ人女性と結婚したシオニスト、ブルーノ・オストロフスキーの両親は、ベルリンの裕福なユダヤ人商人であったが、彼の覚えているかぎり、「両親の家では、ユダヤ的なテーマに関する話し合いなど行なわれたためしはなかった」。両親や両親と同じ階層の人々は、ユダヤ民族を「もはや「生きた実体あるもの」とは思っていない」。それゆえ息子が東欧ユダヤ人の娘と結婚すると聞いたとき、まるで異人と結婚するかのようになり、なみなみならぬショックを受けたのである。花嫁の父は、両親が個人的に交際した最初の東欧ユダヤ人であった¹⁶⁾。東欧ユダヤ人のほうでも、慈善施設等を除けば、生活様式の異なる西欧ユダヤ人たちとあえて係わりをもととせず、独自の組織にまもっていた。ミュンヘンでは1910年以来、ユダヤ人口のうち東欧ユダヤ人の占める割合は、ベルリンと同じく1/4に達していたが、「東欧ユダヤ人大衆と以前から当地に定住しているユダヤ人のあいだには、精神的連帯などなきに等しかった。東欧ユダヤ人の多くは、宗教的には正統派であり、『西欧ユダヤ人』の自由主義と折り合うことは困難だった。彼らはいわゆる『敬虔なシナゴグ』へ行った。そこではユダヤ教の教義が、『西欧ユダヤ人』の礼拝堂よりも保守的に守られていたのである」¹⁷⁾。たしかにトライチュケのいうように、同時代に同じ大学、同じ都市に暮しながら、東欧出身のユダヤ人学生と、ツヴァイクやシュニッツラーらとは、はっきりと人格的アイデンティティのより所が異なっていた。クラカウのユダヤ人街で生れ育ったサウル・ラファエル・ランダウは、ギムナジウムの生徒であった1885年末、ナータン・ビルンバウムによって創刊されたばかりの雑誌『自力解放』を叔父の家で読む¹⁸⁾。そして1889年5月、勉学のためウィーンに出てくると、ビルンバウムやユダヤ・ナショナリズムを志向するユダヤ人の団体と接触し、さっそく文筆活動を開始する。ヘルツルと異なり、ランダウにとってユダヤ民族運動は、弁明の必要のないものであったにちがいない。政治的シオニズムに徹するヘルツルと、ユダヤ民族主義的、社会主義的シオニズムをめざす

ランダウとの間で、路線の対立が生じることは必至であった。ランダウは、ヘルツルのようなユダヤ人国家とユダヤ的な民族精神の分離には納得できないとする。「シオニズムはユダヤ人の民族的運動であり、ユダヤ人の生活のあらゆる問題を、それゆえ政治的な問題のみならず、精神的な問題もまた等しく包括するものでなければならない」¹⁹⁾のである。そしてドイツ・ユダヤ人にとっては、ランダウのように民族的自覚をもった東欧ユダヤ人こそ、同化による統合を台無しにしかねない、もっとも厄介な者たちなのである。もともとドイツに住んでいるユダヤ人たちは、東欧ユダヤ人たちの「ガリツィアなまりの話し方や、異様な服装、奇態なふるまいを恥かしく思った。そしてこの者たちに肩入れすればする度に、くすぶっている反ユダヤ主義をあおり立て、大きな炎にってしまうのではないかと恐れた」²⁰⁾。

第一次世界大戦前、西欧的なものとユダヤ的なものとの矛盾・分裂は、ヘルツルのように傷つきやすい、鋭敏な感性をもつユダヤ人知識人たちをすでに十分苦しめてはいた。しかし、同化し、もはやユダヤ人であるという意識をもたぬドイツ・ユダヤ人のなかでは、反ユダヤ主義を一部の悪しきユダヤ人、とりわけ同化しない東欧ユダヤ人にたいする攻撃であると、我が身にたいする攻撃として受け止めないという奇妙な現象も起こっていたのである²¹⁾。

- 1) Reinhard Rürup, Die ‚Judenfrage‘ der bürgerlichen Gesellschaft und die Entstehung des modernen Antisemitismus, in: Reinhard Rürup, *Emancipation und Antisemitismus*. Göttingen 1975, S. 86. この論文については、愛知教育大学『社会科学論集』第23号(1983年)157-195ページに、近藤潤三氏による邦訳がある。
- 2) Rürup, *ibid.*, S. 84.
- 3) Stefan Zweig, *Die Welt von Gestern. Erinnerungen eines Europäers*. Stockholm 1944, S. 34, 33, 32.
- 4) Arthur Schnitzler, *Jugend in Wien. Eine Autobiographie*. Hg. v. Therese Nickl und Heinrich Schnitzler, Frankfurt a. M. 1981, S. 153. アルビア時代のヘルツルについては、Josef Fränkel, *Theodor Herzl*, Wien 1934, S. 117-131 を参照。
- 5) Alex Bein, *Theodor Herzl. Biographie*. Wien 1934, S. 66 f.

- 6) Schnitzler, a. a. O., S. 153.
- 7) カール・E・ショースキー著、安井琢磨訳、『世紀末ウィーン』岩波書店、1983年、192ページ。
- 8) Theodor Herzl, *Briefe und Tagebücher*. Hg. v. Alex Bein u. a., Bd. 2, Berlin/Frankfurt a. M./Wien 1984, S. 154 f. []は引用者による補い。以下同様。
- 9) Schnitzler, a. a. O., S. 152.
- 10) Schnitzler, *ibid.*, S. 322.
- 11) Theodor Herzl, *Der Judenstaat*, 1896, in: *Theodor Herzl's zionistische Schriften*. Hg. v. Leon Kellner, o. J. Berlin, 1. Tl., S. 121.
- 12) Stefan Zweig, *Erinnerung an Theodor Herzl*, 1929, in: *Begegnungen mit Menschen, Büchern, Städten*. Berlin/Frankfurt a. M. 1956, S. 91 f.
- 13) Heinrich von Treitschke, *Unsere Aussichten*, in: *Preußische Jahrbücher*. Bd. 44, Berlin 1879, S. 573. この論文の後半部については、下村由一氏による邦訳がある。「トライチュケ『われわれの見通し』——訳と解説——」, 駒沢大学外国語部『論集』第1号(1972年)95-118ページ。
- 14) Treitschke, *ibid.*, S. 576.
- 15) Treitschke, *ibid.*, S. 572 f.
- 16) *Jüdisches Leben in Deutschland. Selbstzeugnisse zur Sozialgeschichte 1918-1945*. Hg. u. eingeleitet v. Monika Richarz, Stuttgart 1982, S. 199 f.
- 17) *Jüdisches Leben in Deutschland*, S. 83.
- 18) Saul Raphael Landau, *Sturm und Drang im Zionismus*. Wien (1937), S. 6 f.
- 19) Landau, *ibid.*, S. 85.
- 20) *Jüdisches Leben in Deutschland*, S. 137.
- 21) この点については、前掲下村氏の「訳と解説」から示唆を受けた。

III 第一次世界大戦

——東欧ユダヤ人世界の発見——

ユダヤ人の法的解放が、近代の自由主義の一成果であったことと符号して、ドイツのユダヤ人ゲマインデ(ユダヤ人の自治的組織)では、久しく自由主義的な同化ユダヤ人ブルジョア層が指導権を握ってきた。ところが20世紀初頭になると、東欧ユダヤ人問題を背景にシオニズムが具体的な運動形態をとりはじめ¹⁾、ユダヤ人ゲマインデ内にシオニズム派と反シオニズム派という党派の対立が生じる。そして

同化ユダヤ人のあいだには、東欧から来た粗野で、汚い非同化ユダヤ人下層民やシオニズムのユダヤ民族主義が、反ユダヤ主義を刺激しはしないかという懸念が広がりはじめた。そんなとき第一次世界大戦は、彼らにとってドイツへの愛国心をしめす絶好の機会となるはずであった。彼らはドイツに生命を捧げることにより、真のドイツ人として承認されるものと期待した。前線での共同体験、犠牲、苦難の分かちあいは、ドイツ人とユダヤ人とのあいだにあった隔壁を取り除いてくれるにちがいない。

だが幻滅のおとずれは早かった。戦争が始まってまもない1914年10月、あるユダヤ人兵士は、日記に次のように書く。「しばらく前から私は、私がユダヤ人だということで、疑いの目で見られていることが手に取るようにわかってきた。開戦当初は、いっさいの偏見は消え失せたかにみえ、ただドイツ人のみがいたのだ。だが今では、またおきまりの古い憎まれ口を耳にする。そんなとき私は、兵隊仲間のただ中にいて急に孤独になる。苦しみを分かちあい、互いに心をかけ合い、共通の目的のために行軍しているその兵隊仲間のなかにおいて」。1916年9月、内地でも前線でも反ユダヤ的な動きがあらさまになるにしたがい、「他の人々に受入れてもらえない異邦人であるという、胸を突刺すような感情」は、その度合いを深めて行った。「平均的ドイツ人というものは、なんといってもユダヤ人が嫌いなのだ。私はここでは、ひとりのドイツ人兵士よりほかのものではありたくない。——なのになまさしくみんなは、私がそう思っているまいと気にしているのだ!」²⁾。そしてプロイセン陸軍省が悪名高い「ユダヤ人センサス」を実施するよう省令を發布するのは、この日記後まもなく、1916年10月11日のことである。ユダヤ人兵士にユダヤ人にたいするドイツ人の偏見の根深さを思い知らせた点で、このプロイセン陸軍省令は衝撃的であった。この省令は、ユダヤ人がさまざまな口実をもうけて兵役や前線勤務を忌避しているという噂や市民からの苦情にたいして、事実確認のためと称し、「ユダヤ人センサス」を行なうよう命じるものであった。1932年になってはじめて、「ユダヤ教ドイツ国民中央協会」によって明らかにされた結果によれば、前線勤務についた者、および戦死し

たユダヤ人兵士の数は、いずれもドイツにおいてユダヤ人口の占める割合に合致したものであり、先の噂はまったく根拠のないものであることが明らかとなる。いずれにせよ、戦争のさなかにユダヤ人兵士の忠誠心にたいして嫌疑がかけられたこと、そしてユダヤ人や社会民主党等の抗議にもかかわらず、この差別的なセンサスが実施されたことは、彼らのドイツにたいする愛国心に冷水を浴びせたのである³⁾。はじめの期待が大きかっただけに、幻滅もまた深かった。戦友であるべきドイツ人からの疎外感に苦しんだユダヤ人兵士にとって、戦地東欧での東欧ユダヤ人との出会いがもたらした感激は大きかった。行軍の途上、ユダヤ人兵士たちは、ガリツィアやポーランド、ロシアで、東欧ユダヤ人大衆のあつい宗教心にふれる。彼らは、東欧ユダヤ人の世界に、ユダヤ人である自らのルーツを見い出したと信じたのである。シオニストたちが東欧ユダヤ人世界の発見に熱狂したことはいうまでもない。東欧ユダヤ人たちが堅固に保持しているユダヤ的伝統の世界にふれてはじめて、「ユダヤ民族」というものの存在を確認したシオニストも多かったのである。ポーランドのシオニズム運動を概観した論説のなかで、ユリウス・ベルガーは、この世界を西欧文明によって汚すべきではないとして、次のように述べる。「われわれは、別の世界がなおここで持ちこたえている最後の防壁を破壊し、このスキャンダルのかたまりであるいわゆる西欧文明を導入しようとしているが、いったい西欧は、現在それほどの価値をもつものなのか。われわれが東欧ユダヤ人の前に立ってみると、彼は貧しいかもしれない、単純素朴かも知れない、汚いかもしれない。だがわれわれが西欧文明とよぶ、この最高度の技術と最低の不道徳性とからたぎりたつ蒸気のかたまりに対してみれば、内面的にいつも彼はなんと勝っていることだろう」⁴⁾。だがユダヤ人兵士らにとっては残酷なことだが、「最後の防壁」という言葉によってしめされているように、壁の向う側の世界は、西欧文明の恩恵にどっぷりつかったユダヤ人には決して入りこむことのできぬ世界であった。それはどちらかといえば、好奇心の対象となる異邦人の世界であった。「ヨーロッパのどこにも、いや他の地域にもほとんど見られないような、独特

で珍しい世界」であり、だれも「われわれのドアのすぐ向うにこのような世界があろうとは、考えてもいなかった」ような世界なのである⁵⁾。それは、文明に倦んだヨーロッパ人たちが未開世界にたいしてもつ、あのロマン主義的エキゾチズムを満足させてくれるような世界なのである。うがった見方をすれば、アーノルド・ツヴァイクの『東欧ユダヤ人の相貌』もまた、思い入れに満ちたエキゾチズムのユダヤ版であった。

いずれにせよ戦場での反ユダヤ主義体験と東欧ユダヤ人世界の発見は、ドイツ人とユダヤ人とのあいだにある溝を「普通の」ユダヤ人青年たちにも自覚させる。一部のものたちは、情緒的にユダヤの世界へと回帰することにより、自らの内に生じたドイツ的なものとユダヤ的なものとの分裂から逃れようとした。第一次世界大戦中、あるいは戦後、いわゆるユダヤ的精神世界に回帰すると宣言した者は少なくない。ある従軍ラビは、先の「ユダヤ人センサス」がユダヤ人兵士に与えた精神的打撃を踏まえて、彼らは戦場からよきユダヤ人となって帰ってくるだろうと述べる。彼らは、みな、それまでユダヤ的世界とまったく疎遠になっていた者たちさえ、今では、きわめてはっきりとユダヤ人であることを思い知らされてしまった。「……抑圧と敵意のもとで、われわれに連帯感情が目覚めた。……帰還した我が息子たちや兄弟たちから、……ユーデントゥームへの新しい確固たる意志が生じ、ぐずぐずためらっている者、だらだらしている者たちを引張ってゆくことだろう。その意志こそ、ユーデントゥームの革新を保証するものなのだ」⁶⁾。シオニズムの支持者に転向した者さえ少なくない。だが、ポグロムや戦争で故里を追われ、新たな生活の場所と手段を求めなければならなかった東欧ユダヤ人の場合、シオニズムは切実な現実性をもつものであったのにたいし、ドイツ・ユダヤ人にとってのシオニズムは、結局、傷心を癒す治療薬でしかなかった。当時ドイツに幻滅し、意気消沈していたユダヤ人にとって、シオニズムがもった心理的効果は測り知れないものがある。シオニズムは、耐えがたい精神的混乱に陥った彼らに、新しく専心できる課題を与えた。シオニズムに活路を見い出した者は、そうできぬ者よりも、容易に混

乱に耐えることができたのである。それゆえたとえシオニストであることを標榜していても、彼らがシオニズムの客観的可能性をどれだけ真剣に考えていたかは、別問題である。1926年実際にパレスチナに移住した先のオストロフスキーは、友人のシオニストたちについて次のように回想する。「彼らは、非常によきシオニストだった。確かに私よりよきシオニストだった。だが彼らは、経済的にも、また精神的にも深く根づいたベルリンとの結びつきを捨てたり、上昇中の生活を中断する決意などなしえなかった」⁷⁾。彼らは、さしあたりドイツを離れる気はなかったし、また離れることもできなかったのである。

安易なシオニズムに逃げこむことができぬ者、ユダヤの世界への回帰を宣言したものの、もはやユダヤのユダヤ人にはなりえぬことを自覚する者は、精神的根なし草になってしまった。人気小説作家ゲオルグ・ヘルマンは、これまでの自分は、自分のことをユダヤ教徒であるドイツ国民だと考えてきた、ドイツのなにもに深く同化、共感し、東欧ユダヤ人になりたいほど嫌悪感をもつ典型的な西欧ユダヤ人だと考えてきた、と言う。だがこの5年のあいだに、あらたな幻滅を味わうたびに事態は変わった。「われわれが望むと望まざる とにかかわらず、われわれは、われらのユダヤ的民族性を意識せざるをえなかった。というのも、戦争および戦争と手を携えて進行した根本的諸見解は、年ごとに頻度を増しつつ、しかもいつそうははっきりと、われらと彼ら〔ドイツ人〕とを分かつ本質的な相違、本質的な他者性を見せつけたからである。われわれはドイツ人にたいて、大きな幻滅を味わった。いや、今日もなお、いつ何ときでも味わわなかったためしはない。きつい言葉でも、はっきり言わせてもらおう。——いや、何のために沈黙し、取りつくるわねばならぬというのか?! ドイツ人は、人間本質の粗悪な刻印を保持せる者であることがはっきりした」⁸⁾。ヘルマンは、自分が決してドイツ人になりきってはいなかったことを悟ったという。さりとて、ドイツ・ユダヤ人の一部が心酔した東欧ユダヤ人の世界は、決して彼らの世界ではない。彼らは、すでにユダヤの世界から疎外された人々であった。シオンもまたヘルマンにとって新しい祖国とはなりえなかった。「本当にま

た、国家という、この骨の髄まで笑い物にされた制度のひとつを創設すべきなのだろうか」⁹⁾。今、われわれの精神は、根なし草になってしまった、と彼はいう。結局彼は、よりよき未来の到来にわずかな希望をたくし、私の信ずるシオンとは、人類の未来である、とするのである。もっともヘルマンをまっていた未来は、1943年強制収容所での死であったのだが。

ヘルマンの論説は、当時のドイツ・ユダヤ知識人層の気分を代弁するものである。第一次世界大戦は、開戦時のドイツ・ユダヤ人の期待とは逆に、彼らにとって没落への序章となったのである。

- 1) 拙稿、「シオニズム草創期の 西欧における 東欧ユダヤ人の影」『一橋論叢』第100巻第2号、53-68ページを参照。
- 2) Eva G. Reichmann, *Der Bewußtseinswanderer der deutschen Juden*, in: *Deutsches Judentum in Krieg und Revolution 1916-1923*. Hg. v. Werner E. Mosse, Tübingen 1971, S. 514.
- 3) 1916年10月11日のプロイセン陸軍省令については、Werner Jochmann, *Die Ausbreitung des Antisemitismus*, in: *Deutsches Judentum in Krieg und Revolution 1916-1923*, S. 425 f. および Herbert A. Strauss, *Vom Sonderweg zur "Sonderbehandlung"*, in: *Die Zeit*, Jg. 41, Nr. 7, Hamburg 1986, S. 67 を参照。
- 4) Julius Berger, *Zionismus in Polen*, in: *Der Jude*. Hg. v. Martin Buber, Jg. 2, Berlin/Wien 1917/1918, S. 298.
- 5) Ostjuden, in: *Süddeutsche Monatshefte*. Jg. 13, Heft 5, München/Leipzig 1916, S. 673.
- 6) Reichmann, a. a. O., S. 518.
- 7) *Jüdisches Leben in Deutschland*, S. 205.
- 8) Reichmann, a. a. O., S. 523.
- 9) Reichmann, *ibid.*, S. 523 f.

IV 東欧ユダヤ人問題

東欧ユダヤ人の世界がエキゾチックな憧れの対象としてではなく、「東欧ユダヤ人問題」という現実的な社会問題として姿を現したとき、ドイツ・ユダヤ人の対応はどのようであったらうか。

ドイツ軍の東欧地域進出によって発見された、ぐずれたドイツ語(イディッシュ語)を話す者たち、

すなわち東欧ユダヤ人は、ドイツにとって有益なのか、それとも有害なのか。戦争開始後、東欧ユダヤ人問題が現実性をおびてきた時期をとらえて、『月刊南ドイツ』誌は、特集号『東欧ユダヤ人』を発行する。東欧ユダヤ人に好意的な論説で編集されたこの特集号は、巻頭言において次のように述べる。東欧ユダヤ人は、ある人々にとっては無垢な天使のような存在であり、またある人々にとっては嫌悪の対象であった。だが今は、「親ユダヤ主義者も、反ユダヤ主義者も、しばらく感情を制し、冷静な議論を決意すべき重大な時である。この冊子は、そのような議論のために材料を提供せんとするもの」なのであった¹⁾。というのも先のトライチュケの議論からも明らかなように、実体不明のまま、「たいていの人は、東欧ユダヤ人問題を東欧ユダヤ人の危険というかたちで受けとめていた」からである²⁾。

実際すでに戦争前から、反ユダヤ主義運動の先頭につたゲオルグ・フリッツやヴォルフガング・ハインツェは、東欧ユダヤ人の流入を阻止するための法的措置をこうじるよう訴えていた。「しかしながら東欧ユダヤ人問題においては、5~600の、あるいは5~6000の人間の受入れや統合ではすまないのだ。数百万の、貧しく、身体的にも道徳的にもいじけているのみならず、人種的に異質な者たち、すなわちユダヤ系モンゴル人が問題なのである。彼らを大量に受入れるならば、彼らの生活要求レベルの低さゆえに下層中産階級の経済状態は切下げられ、また彼らが農村地帯に広がることによって、ほとんど解放されていない農民階級があらたな打撃を被り、こうして、ドイツ民族の性格全体にかたよった、有害な影響が及ぶことになろう。要するに彼らを大量に受入れるならば、われわれは、一段と激しさを増したユダヤ人問題の再現に直面することになろう。もっともひどく脅かされるのは、我がドイツのユダヤ人たちである。彼らが努力して獲得した政治的、社会的同権にたいして、それを引きずり落とすような重りがくっつくことになるだろう。つまり、かつてよりいっそう激しく燃え上がったユダヤ人問題にたいしては、[ユダヤ人の]同権を取り下げるといふ、反ユダヤ主義的な方向での解決も、もはや避けがたいものとなるであろう」³⁾。「たとえ公式の統計が沈

黙していようとも、ドイツがこれまですでに東欧ユダヤ人の強烈な流入に見舞われていることは、大都市を見て回った誰もが確認できることである。戦争後、東欧ユダヤ人移民の波が大変な勢いでふくれ上がるという予測は、少なからず正しいと見てよからう」⁴⁾。

ハインツェらの予測通り、第一次世界大戦の進行とともに、東欧ユダヤ人の「民族大移動」が本格化する。「まったく『手のつけられていない』、これまでほとんど歴史をもたなかったユダヤ人たちが西欧文明のなかに進入してきたのだ。……貧しいが、しかし成功をもとめている、未開ではあるが、しかしきわめてすぐれた文化的能力をもつ数百万のユダヤ人たちが、ゆっくりと、だがとどまることなく西に向かって進んでくる」⁵⁾。この民族大移動を、ユダヤ民族主義者は「ユダヤ人の歴史の新時代」と受けとめたが、ドイツおよびドイツ・ユダヤ人にとってそれは、深刻な社会問題を引き起こすことになった。

第一次世界大戦の開始前、すでにドイツに居住していた他国出身のユダヤ人は約9万人、出身地別にみるとオーストリア・ハンガリー帝国から5万6000人、ロシアから2万3000人であったといわれる。戦争が始まると、ドイツ内地の労働力不足を補うために、ロシア、ポーランドのドイツ占領地域から、捕虜あるいは労働者としてドイツ本土に強制的に連れてこられた者、あるいは出稼ぎ労働者としてきた者、計約7万人が加わり、1918年の戦争終結時には、他国出身のユダヤ人の数は16万人となる。さらにこれにポグロムや戦争による難民として逃れてきた者が加わる。他国出身のユダヤ人の出身地構成もまた大きく変化し、ロシア、ポーランド地域の出身者が6割方を占めるようになる。戦後東欧の政治的再編により、これらの地域から来たユダヤ人の国籍は混乱し、無国籍者となった者も多く、また東欧の郷土は戦争によって荒廃し、帰郷しても生活の目処はなく、彼らの本国送還はほとんど不可能であった。これらドイツに流入し、そのまま残留したユダヤ人の40%以上は、ベルリンの、しかも「穀倉街 Scheunenviertel」とよばれる貧民街に集中して住み、ベルリン市民の反ユダヤ感情を刺激することになる⁶⁾。先にみたようにフリッツなどは、東欧ユダヤ人の危険

を理由として、ユダヤ人から同権を撤回しようとしている始末であった。人口の上では、ドイツ全体でユダヤ人の占める割合は、出身に関係なく総数においてもつねに1%程度である。1925年のベルリンについてみると、ユダヤ人の占める割合は4.3%に達するが、そのうち他国出身のユダヤ人の占める割合は1/4強で、ベルリンの人口の1%にすぎない。だが反ユダヤ主義者は、その東欧ユダヤ人の数を誇張することによって、戦後の住宅難、食料難、失業等、あらゆる社会的困難の原因を彼ら居候のせいにする。ドイツの労働組合もまた東欧ユダヤ人の弁護者ではありえず、ドイツに失業者がいるかぎり、外国人労働者は受入れるべきではないとする。事態を憂慮したドイツ・ユダヤ人は、東欧ユダヤ人のための収容施設の建設、職業斡旋等の救援活動を開始した。だが彼らにとって東欧ユダヤ人は、厄介なお荷物以上の者ではなかったのである。

東欧ユダヤ人の出現は、心理的にもドイツ・ユダヤ人を動揺させた。東欧ユダヤ人は、ドイツ・ユダヤ人がすでに克服済みと信じていた全問題を再燃させずにはおかなかったのである。ドイツ・ユダヤ人の多くは、程度の差こそあれ、自分たちは民族共同体ではなく、プロテスタントやカトリック教徒と同様、信仰にもとづく共同体を形成するもの、すなわちユダヤ教を信仰するドイツ人であるというテーゼを信じていた。またこのテーゼを周囲のドイツ人にたいして証明したいからこそ、第一次世界大戦においては、喜々として従軍したのではなかったか。だが今彼らが目の前にしている東欧ユダヤ人のもつ民族的性格は、否定しようがなかった。彼らと自分たちとは、ユダヤ人として同じなのか、それとも自分たちはドイツ人であり、ユダヤ人である彼らとは違うのか。ドイツ・ユダヤ人は、自分自身にたいして自らのアイデンティティをはっきりさせるよう迫られたのである。そして彼らの本音は、自分たちと東欧ユダヤ人とをいっしょにしてほしくないということにあった。「ドイツ民族主義を奉じるユダヤ人にとって、東欧ユダヤ人は異邦人である。東欧ユダヤ人は、感情的にも、精神的にも、身体的にも異邦人である。……ドイツはひどく病んでおり、ユダヤ人であろうと、スラヴ人であろうと、東方からの危

険な客人たちに庇護権を与えることなどできないのだ。……東欧ユダヤ人の問題は、われわれにとってはユダヤ人の問題ではない。それはドイツの問題なのだ」⁹⁾。この厄介者の東欧ユダヤ人を追い出す手立てとして、シオニズムの意味もまた変わってくる。親ユダヤ主義者と反ユダヤ主義者とが、声を合せてシオニズムを推奨するという事態が起こるにいたるのである¹⁰⁾。

まずシオニストたちが、第一次世界大戦による東欧世界の激変とバルフォア宣言にシオニズムの新時代到来を見たことはいうまでもない。「ユダヤ人のパレスチナ移民促進ドイツ委員会」発行の「東欧ユダヤ人問題とパレスチナ」と題する冊子の筆者は、「戦争による東欧ユダヤ人社会の荒廃は、筆舌に尽くしがたく、」しかも東欧において「こうした状況が改善される見込みはほとんどない」¹¹⁾と述べる。以前には、パレスチナ移民は、ロシアや東欧で食いつめたユダヤ人貧民の最後の手段であった。だが第一次世界大戦後の今では、貧民ばかりでなく、中、上流階層に属していた東欧ユダヤ人たちもまた生活の術を失い、移民を余儀なくされるにいたった。折りしもこの時期にみあって、1917年バルフォア宣言が出されたことにより、「『政治的』シオニズムの希望は、実際みたされるところとなった」¹²⁾とするのである。

定住地における同化こそ、ユダヤ人問題の唯一の解決策であり、シオニズムは実現不可能なユートピアであると批判するユダヤ人もまた、東欧ユダヤ人については、シオニズムが、純粋に民族主義的な運動というよりは、社会改革的な意図をもつ運動であることを認めざるをえなかった。東欧ユダヤ人のパレスチナ移住は、「人道主義的な理由から」正当化せざるをえないというのである¹³⁾。

他方フリッツら反ユダヤ主義者は、東欧ユダヤ人が反ユダヤ主義のもとになっているというドイツ・ユダヤ人の懸念をたくみに利用しつつ、こう呼びかける。「我がドイツのユダヤ人たちよ、あなたがたは、われわれといっしょに、火急の東欧ユダヤ人問題解決のために努力して当然ではないだろうか。その解決とはつまり、新しいディアスポラ、すなわち受入れを望まぬ他民族のあいだにこれらの人々〔東

「ユダヤ人」を離散させるというやり方や、わけても我がドイツ帝国に無制限に入国を許可するなどといったやり方ではなく、シオニストたちがいっているような、彼らをできるだけひとまとめにして移住させるというやり方での解決である¹²⁾。

多くのドイツ・ユダヤ人は、東欧ユダヤ人を、自分たちとは無関係な他者として切り捨てようと必死に試みた。東欧ユダヤ人の運命を我が身の運命として問題にせず、東欧ユダヤ人問題と自らの関係を問うてみようとはしなかった。脅かされた者は、たとえ敵方の身振りを我が身振りとしなくてはならないとしても、敵の目から自らを隠そうとつとめる。ドイツ・ユダヤ人が、「ドイツ人として」反ユダヤ主義者の東欧ユダヤ人誹謗に加担したことについて、第二次世界大戦後、東欧ユダヤ人から厳しい批判の声が上がり、ナチスの暴虐はこのようなドイツ・ユダヤ人にたいする天罰という者さえいたといわれる¹³⁾。だがどこまで彼らを責めることができようか。人種的反ユダヤ主義は、ドイツ・ユダヤ人をも包摂しなかった。ドイツ・ユダヤ人が自分たちと東欧ユダヤ人とを区別しようとして行なったあらゆる試みは崩壊する。ユダヤ人は、人種の原理によって、自尾一貫性をもって集団的に絶滅の対象とされたのである。

- 1) Ostjuden, S. 673.
- 2) Ostjuden, S. 821.
- 3) Georg Fritz, *Die Ostjudenfrage. Zionismus & Grenzschluß*. München 1915, S. 43.
- 4) Wolfgang Heinze, Ostjüdische Einwanderung, in: *Preußische Jahrbücher*. Bd. 162, Berlin 1915, S. 99.
- 5) Reichmann, a. a. O., S. 541.
- 6) Wilhelm Treue, Zur Frage der wirtschaftlichen Motive im deutschen Antisemitismus, in: *Deutsches Judentum in Krieg und Revolution 1916-1923*, S. 396 f. また *Ostjuden in Deutschland*. Schriften des Arbeiterfürsorgeamtes der jüdischen Organisationen Deutschlands. Heft II, Berlin 1921, S. 6 f. und 14. 表1, 表2を参照。
- 7) Reichmann, a. a. O., S. 541.
- 8) ナチスもまたシオニズムを利用し、ユダヤ人の国外排除を促進しようとした。ナチスのこの政策は、ユダヤ人の国外移住者に「ライヒ逃避税」を課すなど、ユ

表1 ベルリンにおけるユダヤ人口の増加と他国出身のユダヤ人の占める割合

年	ユダヤ人口	他国出身のユダヤ人	%
1880	53,916	2,954	5.5
1910	143,965	21,683	15.1
1925	172,672	43,838	25.4
1933	160,564	48,075	29.9

出典：S. Adler-Rudel, *Ostjuden in Deutschland 1880-1940*. Tübingen 1959, S. 164 f.

注：1921年当時のベルリンの人口は、402万4165人。

表2 1925年のドイツに居住する他国出身のユダヤ人10万7747人の国籍

出身国	%	出身国	%
ポーランド	47.3	ロシア	8.8
オーストリア	12.5	リトアニア、ラトヴィア	2.9
チェコスロヴァキア	5.2	その他	7.2
ハンガリー	3.0	無国籍	9.2
ルーマニア	3.0	不明	0.9

出典：S. Adler-Rudel, a. a. O., S. 166.

ユダヤ人にたいする一連の厳しい経済的剝奪政策と一対をなすものであった。これらの点に関し、詳しくは、大野英二『ナチズムと「ユダヤ人問題」』（リプロポート、1988年）の第2-4章を参照。

- 9) R. Leo, *Das Ostjudenproblem und Palästina*. Berlin 1919, S. 33.
- 10) Leo, *ibid.*, S. 35.
- 11) Karl Landauer und Herbert Weil, *Die zionistische Utopie*. München 1914, S. 72.
- 12) Fritz, a. a. O., S. 44.
- 13) Peter Gay, *Freud, Jews and other Germans*. New York 1978, p. 186.

V 結びにかえて

アメリカにとって、「ユダヤ人であることは感動をともしなわれない。不安と怒りにおいてしかそれを知らず、尊厳をもとめて不安が怒りに姿を変える¹⁾」。彼をユダヤ人と結びつけるものは、「脅威を前にした連帯」でしかない。左腕にぎざまれた、アウシュビッツの6桁の数字が彼にユダヤ人との連帯を余儀なくさせるのでしかない。アメリカは、戦後、経済的にも、文化的にも、あふれるような活力をしめしてよみがえったドイツにルサンチマンを感じながらも、「ドイツ語は私の言葉だし、この私は、ともあれドイツ人にちがいない²⁾」と述べる。

自己と他者との関係が、脅威を媒介にしているこ

(79頁へ続く)

(75頁より続く)

とほど不幸なことはあるまい。その他者が自己の内なる他者、自己に他ならない他者であればなおさらである。第一次世界大戦期のドイツ・ユダヤ人にとって、この他者は、同胞に他ならない東欧ユダヤ人であり、また西欧的なものに同化した自己の内にある非同化のユダヤ的なものであった。反ユダヤ主義の脅威が身に迫ってきたとき、ドイツ・ユダヤ人たちは、われらドイツ人と彼ら東欧ユダヤ人たちは他人同士であると主張し、彼らよそ者がパレスチナでもアメリカでも、一刻も早く立ち去ってくれるよう願った。だがそうしながらも、我が内面的世界をのぞき見たとき、多くのドイツ・ユダヤ人たちは、アメリカのように、「ユダヤ人としての私」を完全に他者化し、突放してみることはできなかったであろう。自己と、自己のなかにある他者的なもの

の「分裂的共存」に苦しみぬいたはずである。ドイツ・ユダヤ人にとって、この苦しみを相対化する道はあったのか、いやあるのか。

自己完結的なものは、自らにとって異質なものを恐れ、差別し、排除しようとする。この苦しみを相対化しようとするならば、まずは他者がなぜ自らにとってよそ者であるのか反省的に問うてみることに、自己のなかにある他者的なものを自分自身のものとして担うこと、そのようにして、自らのアイデンティティを開かれたものにするところからはじめねばならないだろう。

- 1) アメリー『罪と罰の彼岸』、180ページ。
- 2) ジャン・アメリー著、池内紀訳、『さまざまな場所』法政大学出版局、1983年、182ページ。